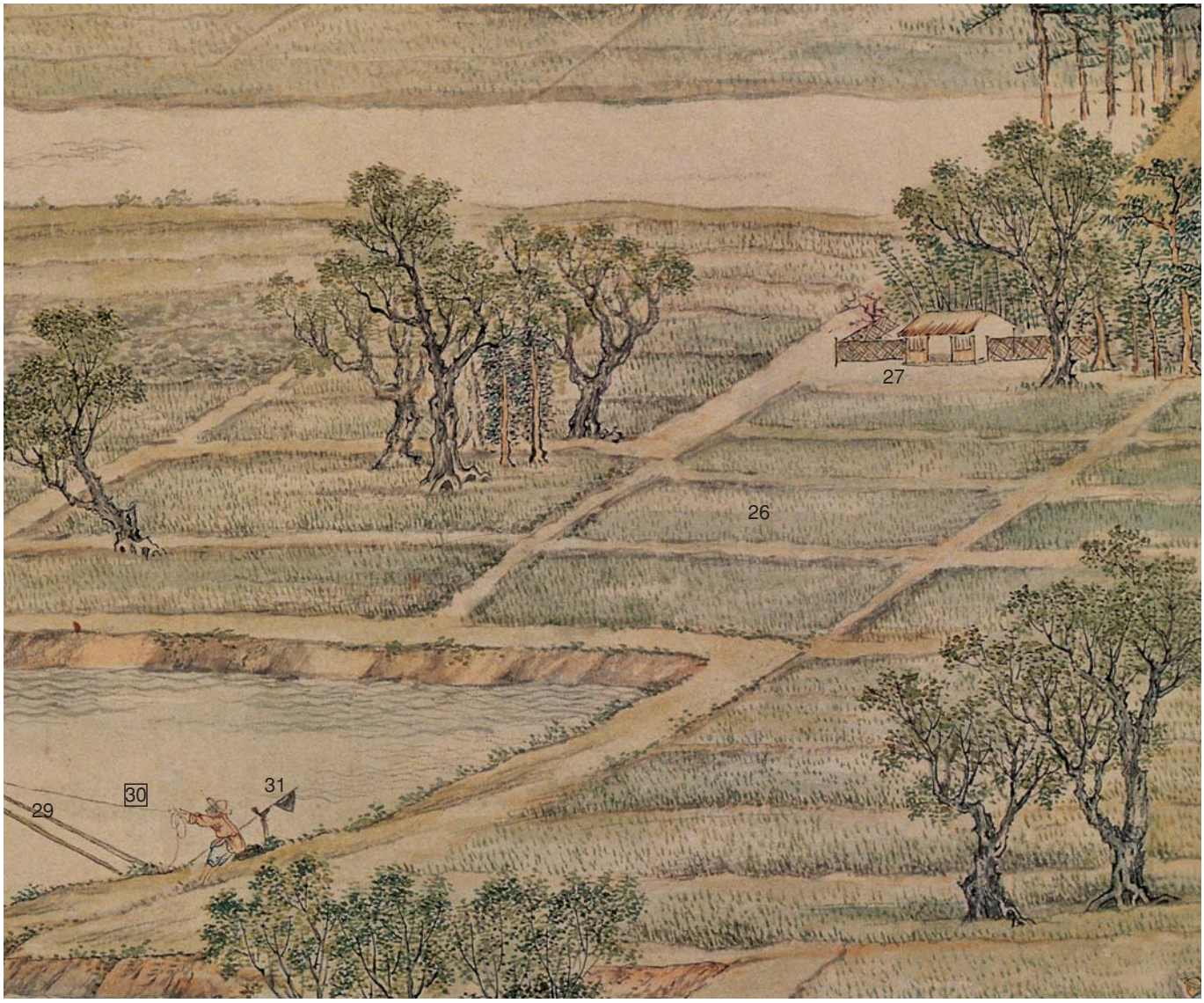
Ⅱ

村の風景

9　運河に囲まれた農村風景

1　幟棹
2　物見櫓
3　板塀
4　草屋根
5　切妻
6　日除け
7　輿
8　鴟尾（しび）
9　瓦屋根
10　入母屋
11　太鼓橋（単拱石橋）
12　帆
13　苫（船篷）
14　艫（とも）
15　舟を曳く
16　曳き綱
17　もやい柱
18　倒した帆柱
19　棹で操作する
20　牛飼い
21　水牛
22　野良道
23　畦
24　鞭
25　犂
26　株の残った水田
27　網代垣
28　四つ手網
29　支え木
30　網を操作する
31　たも網



木涜鎮のはずれの田園風景を描く。運河が縦横に走り、そこには各種の舟が行き来している。帆を張って進む小型船、逆方向に曳き綱で曳かれて進む小型船、また棹を操作してゆっくりと進む大型船などを見ることができる。運河には魚が豊かに生息している。それをねらって四つ手網が設置されている。漁師が綱を操作して引き揚げ、魚を獲ろうとしている。横には獲った魚を網から移すためのたも網も用意されている。

図の中央部には広々とした水田が広がっている。水田は長方形に区画されているように見える。稲は刈り取られ、株だけが残されており、冬から春に移ろうとする時期であろう。水牛に犂を曳かせて田の中を進んでいる農民がいる。固くなっている水田を犂で起こす荒起こしをしているものと思われる。犂の背後の2枚の水田は荒起こしがすんでいるようである。水田の端では嫌がる水牛の鼻をとって橋の方へ導いている様子も描かれている。

運河の左側には集落が見られる。耕地からは石の太鼓橋を渡って集落に入る。運河の横には道が走り、それに面して店も並んでいる。その集落の外れの運河に面したところに監視用の物見櫓が立てられ、横には幟を付けた棹が見られる。脇には木の柵を巡らした家があり、入り口には日除けが張られている。（福田）

10　村の広場

蘇州東南の名山、霊岩山の麓の集落の中心にある広場を描いた風景である。広場の周辺には煙草屋、料理屋、雑貨屋がある。福建の煙草を商う煙草屋の前では、棒手振りの魚屋が客の目の前で、竿秤で魚の重さを量っている。料理屋では客が5人いて一杯やっており、給仕が1名横に立っている。隣の雑貨屋では親子らしき2人が店番で、蓋付きの容れ物が並んでいることから乾物屋かと思われる。店の奥の壁に水差し（油差し）や赤いものが見えるが、食品か否かもよく分からない。

画面の左手広場の中央には、普請中ながら立派な門構えの家へ出入りする人々が4人描かれている。運んでいるのは水、敷石などで、篭の中の白いものは石灰と思われる。その上には画面右側へ広場を横切り、田園地帯に向かう輿と担ぎ手、親子連れが描かれている。

1 学生
2 書籍
3 小間物屋
4 背負い篭
5 でんでん太鼓（抜浪鼓）
6 脚絆（綁腿）
7 長柄傘
8 魚屋
9 竿秤
10 魚
11 飯台（木盆）
⑫ 煙草屋
13 煙管
14 看板「浦城建煙」
15 招き（酒旗）
16 草葺の日除け（涼棚）
17 掘立柱
18 酒を飲む客
19 給仕
20 腰掛（板櫈）
21 天秤棒（扁担）
22 下げ緒
23 篭（籮）
24 絡げた裾
25 敷石（地磚）
26 こんろ（炉）
27 水桶
㉘ 雑貨屋
29 看板「雑貨」
30 主人
31 女の子
32 上着（短衣）
33 ズボン（褲子）
34 輿（轎子）
35 長柄（轎桿）
36 輿かき（轎夫）
37 拭き帯（汗巾）
38 手を引く
39 男の子
40 帽子（暖帽）
41 上着（馬褂）
42 風呂敷（包袱）
43 長着（袍子）
44 布靴（布鞋）
45 大棟（屋脊）
46 瓦屋根
47 瓦座（封檐板）
48 垂木（椽）
49 長押（額枋）
50 築地塀（囲墻〔滴水〕）
㊿ 門
52 蹴放し
53 階段（台階）

画面の下の方から広場へ入ってくるのは片手にでんでん太鼓を持つ小間物屋、傘売り、それに前の荷にこんろ、後ろに食器らしきものを担いでいるのは雲呑などを売っているのであろう。前の荷の篭に棒が突っ込んであるのは何を商っているのか、何を運んだのか不明である。

画面の一番左の若者2人は塾へ通う学生である。（鈴木）

11　普請の現場と塾

画面の上方は普請中の現場で、二人がかりで大きな木材から板を切り出している場面が描かれる。こうした場面は明代の『天工開物』でも、清末の『点石斎画報』でも見ることができ、どれほど現実的であるかについて大いに疑問が残る。

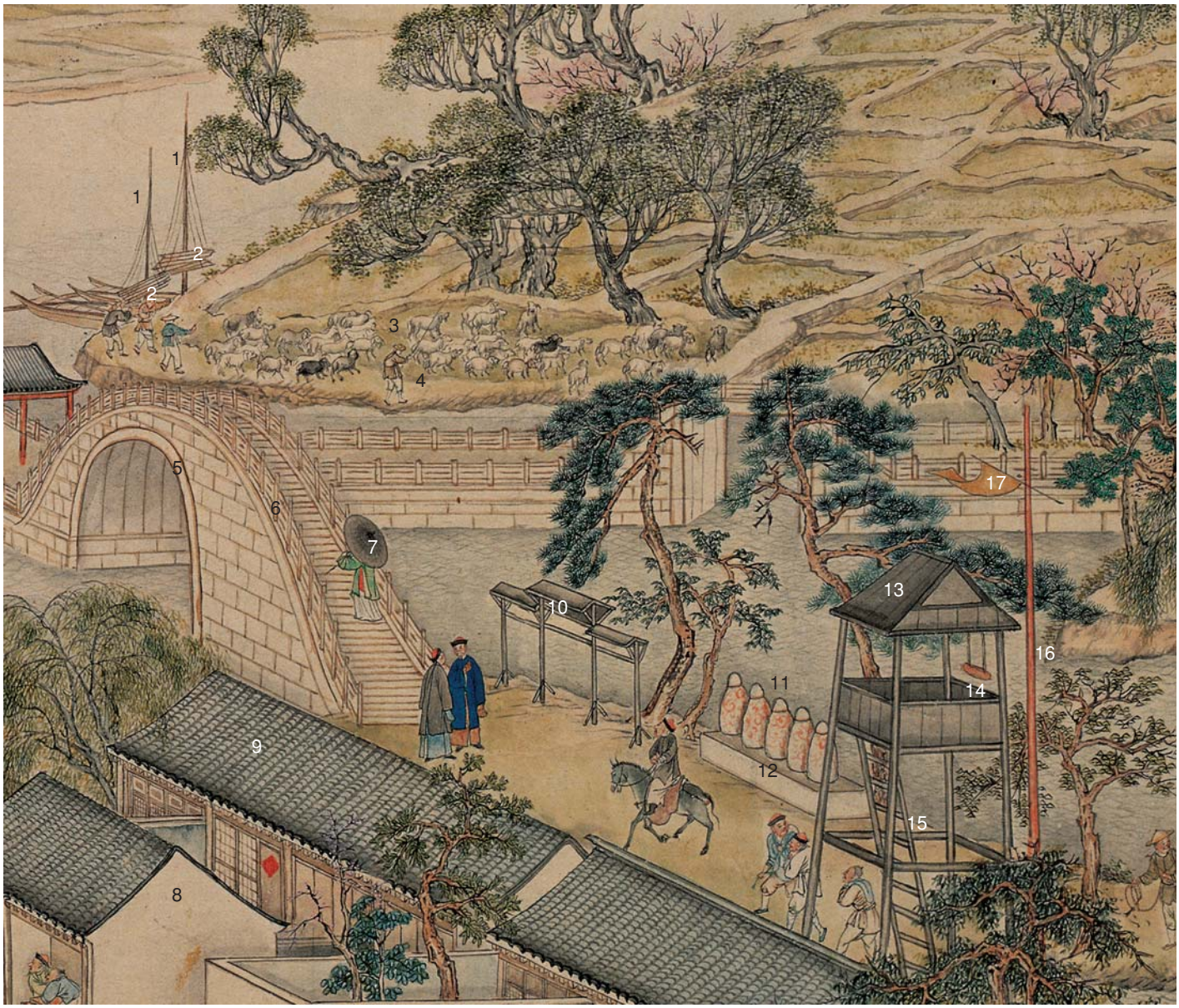
屋根の上では瓦を葺いている。座り込んでいる人物の手に握られているのは長い釘のようで、瓦を載せる前に板を打ち付けているものと考えられる。その他の人物は、漆喰を板の上に塗り、その上に瓦を並べている。これは現在古い建物の復元工事でも同様な手法で屋根が葺かれているので、間違いはあるまい。しかしながら、彼らが手に持っているものが、水か或いは石灰の類かと思われるものの何であるか明確でなく、屋根の上の人物の動作も極めて不自然

1 切妻
2 瓦
3 片膝をつく
4 梯子
5 梯子をのぼる
6 瓦を葺く
7 笠
8 水桶
9 野地板
10 裾を巻き上げる
11 柱
12 垂木（椽）
13 桁
14 貫
15 鋸
16 鋸を引く
17 踏み台
18 丸太
19 楔
20 欄間（横披）
21 簾
22 格子戸（槅扇）
23 欄干
24 庭を掃く
25 竹箒
26 帽子（暖帽）
27 上着（馬褂）
28 長着（袍子）
29 靴下（襪子）
30 布靴（布鞋）
31 庇（檐篷）
32 日除け（幔）
33 教師
34 学生
35 硯
36 机
37 帙入り書物
38 椅子
39 膳板（榻板）
40 腰壁（檻墻）

であり、甚だリアリティに欠けると言わざるを得ない。左側の梯子の位置、右側の梯子の上の人物の立ち方からも、画家が現実を観察して描いたものではないことが分かる。

画面の下半分は塾の庭を竹箒で掃く召使いと、塾の中での授業の様子が描かれている。この部分の特色は、壁が切り取られている架空の設定のもと、見えるはずのない塾の中をはっきりと描いたことにある。生徒は先生に文章の手直しをされているらしく、硯には朱墨を擦った跡が見え、生徒は跪いて教えを乞うている。屋根の上の描き方と異なり、細かく丁寧に描いているのは、こうした場面こそ作者が最もよく知っているものだからであろう。（鈴木）

12　橋のたもとの牌楼と物見櫓



1　帆柱（桅）
2　折りたたんだ帆
3　羊
4　羊飼い
5　太鼓橋（単拱石橋）
6　欄干
7　長柄傘
8　切妻
9　瓦屋根
10　牌楼
11　不明物体
12　基壇（台基）
13　物見櫓
14　磬鐸
15　梯子
16　幟棹
17　幟（幡）
18　船を曳く
19　曳き綱
20　錨
21　棹
22　艫綱
23　倒した帆柱
24　もやい船
25　水田
26　舵
27　野良道

蘇州郊外の景勝地石湖近くの農村風景である。先ず注目されるのは、羊飼いが羊の群れを追っていることである。この地方は生糸の生産地であるが、また羊毛生産も行われていたことが分かる。石湖側から太鼓橋を渡って下りてくると、そこには運河に面して牌楼が立てられ、さらにそれと並んで5基の石造物が基壇の上に整然と据えられているのが分かる。その描き方から石であると判断されるが、その形状から推定できる当時の物を知ることができな

い。ここでは不明物体としておくしかないが、「姑蘇繁華図」にはもう1カ所全く同じものが描かれており、やはり水辺に面して立てられている。船を繋ぎ止めるにしては、5基が近接しすぎているし、形状も不自然である。これを路神と解説している説明文もあり、何か信仰対象になる物とも考えられるが、その類例を発見することはできない。蘇州および城外を描いた図像を観察すると、同様に5基の物体が描かれていることを確認できる。例えば、清の陸肇域・任兆麟の『虎阜志』(1792)に挿入された「虎丘山塘図」では、桐橋の向かいと西山廟の近くの2カ所にそれらしきものが見られる。「姑蘇繁華図」の図も含めて、いずれも横には牌楼、物見櫓があり、なんらかの公的な建造物と考えられる。

運河にはもやい船が繋留されていたが、そのうちの1艘は3人の曳き手によって曳航されて移動を開始している。(福田)

13　春の野良仕事

湖や川に囲まれた農村風景である。季節は、水田に稲が育ち始めているように見えるので、春であろう。「姑蘇繁華図」は都市景観を専ら描き、農村はごく一部しか描いていない。蘇州城の西南方の農村であるが、太湖から続く水郷であることがよく示されている。集落はやや疎らな集村という趣である。家は瓦葺きの切妻であり、現代の様相と変わらない。そのなかに、草葺きの家が混じり、また入母屋造りの家があることは注意して良いであろう。現在の江南地方ではほとんど完全に農家建築は切妻の建物になっているが、以前は別の屋根型の建物も少なくなかった。現在では家鴨小屋には草屋根の寄棟や入母屋造りの建物が見られるが、かつては住居も寄棟、入母屋が基本だったと思われる。切妻の瓦屋根・白壁の建築は北方から普及して中国全土を制覇したという推測もできる。ここに描かれた集落景観は、瓦葺きの切妻がすでに多数を占めているが、未だ入母屋も残っているという過渡的な様相を示している。

水際まで完全に開拓されて水田になっている。そして、注目されるのは、湖の岸辺近くは干潟のようになっており、水のある所との境には菅か葦が横一列に配置されていることである。この部分は現時点では耕地になっていない。しかし菅や葦で囲い込み、水を入れず、陸地化しようとしているように思われる。小規模な個別干拓と判断して良いのではなかろうか。たゆみない耕地化の努力がされているのである。

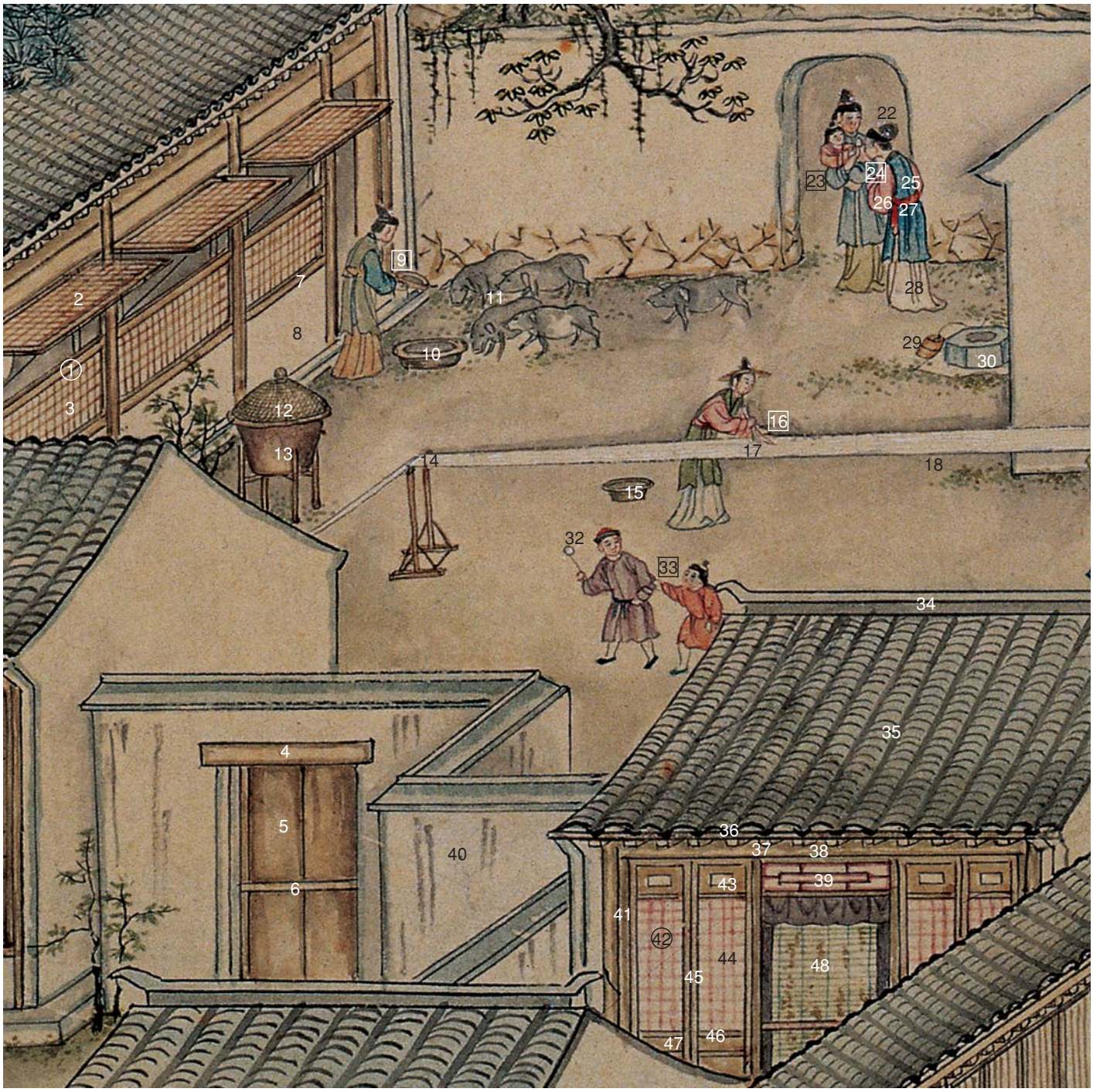
春先の農業をここから読むことができる。水牛を連れて歩く牛飼いも見られるが、全体としては畜力

1 棹
2 唐傘
3 艪を漕ぐ
4 船
5 牌楼
6 不明物体
7 門
8 木柵
9 腰掛けを運ぶ
10 担い棒
11 槍
12 刺股
13 刑具（板子）
14 白壁
15 突上げ窓（支窓）
16 旗
17 旗竿
18 入母屋
19 網代垣
20 熊手鍬・四本鍬
21 藁にお
22 瓦屋根
23 招き
24 格子戸
25 橋脚
26 木橋
27 荷
28 担い棒で運ぶ
29 切妻
30 草屋根
31 日除け
32 石塀
33 肥桶
34 天秤棒
35 下肥を田に撒く
36 柄杓
37 水田
38 畑
39 水牛
40 牛飼い
41 簀
42 帆
43 舵を操作する
44 垣根
45 苫（船篷）
46 潟
47 葦
48 野良道

での作業は見られない。専ら熊手（四本鍬）による作業のようであり、農民は熊手を担いで歩いている。そして、水辺の水田では、肥桶と思われる桶を置いて、そこから柄杓で汲んで水田に下肥を撒いていると推測される場面が描かれている。日本でも水田に大量の下肥が入れられたが、それと同じことが行われていたのであろう。

この図の左部分の川に面した所に、やはり5体の不明物体が見られる。横には牌楼、そして道路の向かい側には警備用具を備えた詰め所のような建物がある。この牌楼、警備役所とセットで見られることに注意することで、不明物体の意味を明らかにすることができよう。（福田）

14　家庭内の生糸作りと織物生産



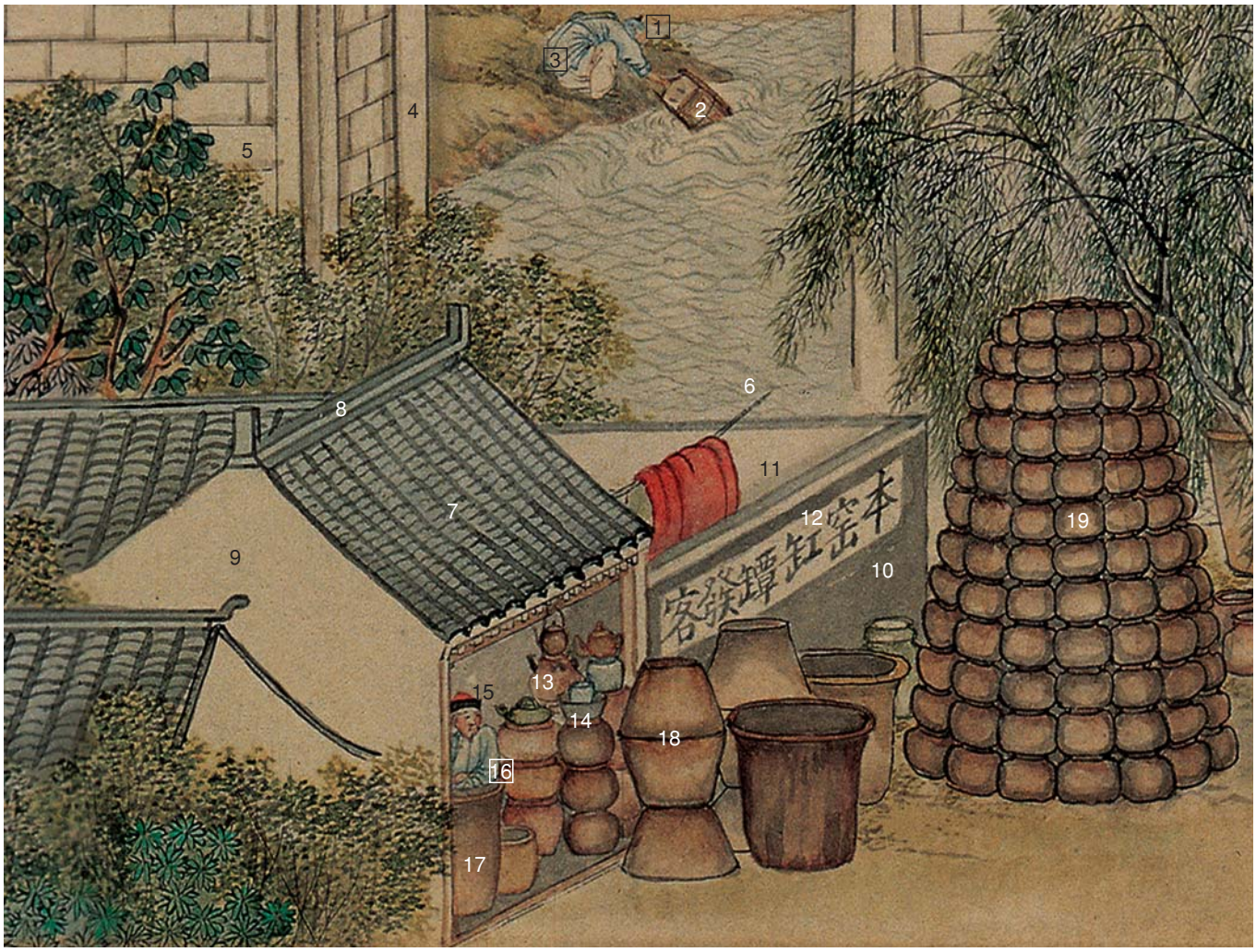
農家の生糸・織物生産の場面である。中庭で、三人の女性が経糸に糊をつけ、整理して、緒巻に巻いている。その左手に、繭を貯蔵する甕がある。人手が足りずすぐに糸をとり尽くせない場合、蚕を羽化させないように、塩で軽く漬けた繭を入れる容器である。こうして、繭の減損を防ぐほか、糸の艶を増すこともできるという。庭の片隅に豚に餌を与えている女性が見られる。この餌は経糸につける糊をこした後にできた滓（かす）であるかもしれない。

江南地域では、古くから養蚕が盛んであり、織物をめぐる諸産業が発達している。そして、ここに見られるように、養蚕・機織りは主に女性の仕事であり、家で行う営みとされていた。画巻のほかのところに描かれている農夫たちが田で働いている場面とあわせて、伝統的な中国人にとって社会の理想像である「男耕女織」、即ち、男は食糧の生産に力を尽

① 蔀戸（支摘窓）
2 上げ蔀
3 蔀下戸
4 楣
5 観音開きの木戸（対開板門）
6 閂
7 膳板（榻板）
8 腰壁（檻墻）
9 豚に餌を与える
10 餌
11 豚
12 蓋
13 繭を貯蔵する甕（繭甕）
14 経車
15 糊
16 糊を経糸につける（漿紗）
17 刷毛（纑刷）
18 経糸
19 経糸を整理する
20 鉢巻（包頭）
21 経糸を巻く
22 まげ（髻）
23 赤ん坊を抱く
24 赤ん坊をあやす
25 袖なしの長着（半臂）
26 上衣（短衫）
27 扱き帯（汗巾）
28 スカート（裙子）
29 釣瓶（吊桶）
30 井戸
31 突上げ窓（支窓）
32 でんでん太鼓（拔浪鼓）
33 袖を引っ張る
34 大棟（屋脊）
35 瓦屋根
36 瓦座（封檐板）
37 垂木（椽）
38 長押（額枋）
39 欄間（横披）
40 築地塀（囲墻）
41 方立柱（抱框）
42 唐戸（槅扇）
43 格狭間（簾架心）
44 格子
45 竪框（辺框）
46 帯桟（抹頭）
47 鏡板（環板）
48 簾
49 切妻（山墻）
50 少年
51 老婦
52 白髪
53 杖
54 数珠（念珠）
55 盆栽（盆景）
56 鉢（花盆）

くし、女性は衣料品の生産に取り組む、自給自足の社会を表現していると思われる。しかし、明清時代に、織物の生産はすでにある程度産業化しており、養蚕から紡織まですべて行う家もあったが、生糸の加工だけに従事し、問屋と取引するのもあった。ここで作った生糸は、そのまま家で織物にするのか、問屋に売るのか、この画面だけでは知ることができない。（彭）

15　焼物問屋



1 川の水を汲む
2 水桶
3 しゃがむ
4 橋杭（橋柱）
5 側壁（山花墻）
6 物干し竿
7 瓦葺（瓦房）
8 大棟（屋脊）
9 切妻（山墻）
10 塀（囲墻）
11 庭
12 宣伝文句「本窯缸罈発客」
13 土瓶（水壷）
14 鉢
15 帽子（暖帽）
16 甕に寄りかかる
17 甕
18 互い違いに積んだ甕
19 高く積み上げた壷（罈）
20 寛ぐ
21 笠
22 煙管
23 石に座る
24 手をつく
25 立膝
26 縁台（机凳）
27 上着（長衫）
28 枝垂れ柳
29 停泊中の船
30 苫（船篷）
31 服
32 逆さまに伏せた甕
33 天秤棒で担ぐ
34 帽子なし
35 扱き帯（汗巾）
36 脚絆（綁腿）
37 桃の花
38 乱積み（乱石岸）
39 切り石（条石）
40 老人
41 杖
42 子供
43 指差す

かめやつぼなどの焼物が店の内外に多く積まれており、壁に大きく「本窯缸罈発客」と書かれている。「本窯」とは、代理販売に対して自前の窯で作られたという意味であり、「発客」は出荷を意味している。周囲には窯らしき施設は見られないので、焼物問屋であろう。

日用の貯蔵陶器は、日本では大きくかめとつぼの二種類と分けているが、中国では大きさや形によって多様な呼称がある。「缸」とは底が小さく、口が広く開かれる大型容器で、日本のかめにあたる。「罈」は胴が短く膨らみがあり、口が小さい中型の陶器であり、日本のつぼにあたる。それ以外、底と口が小さく、胴が膨らみ、やや高さのある「瓮」、把手と注ぎ口が付いている「壷」、胴が膨らみ、口が小さく首が長い「瓶」、円筒形の「罐」などがあり、これらは米、水、漬物、醤油、酒、塩などの貯

蔵に活用されている。

『天工開物』(1637)ではこうした丸くて角ばっていない焼物を一括して「罌瓮」と呼び、大物は「缸瓮」、中型は「鉢盂」、小物は「瓶罐」と記している。轆轤台で上下二つの部分をそれぞれ造ってから繋ぎ合わせる作り方が共通であり、ただ結合の際、口の大きいかめは木槌で内外から叩き固めるが、口の小さいつぼ類は、前もって準備しておいた輪状の瓦で内側から押し当て、外から木槌で叩き固めるという。内外にシダ植物の灰による釉薬が使用される。

店の中に小型の鉢や土瓶も幾つか見られるが、数は少なく、大型のかめやつぼが主要な商品である。空間の広さや火力の違いによって当時の窯には大物用の「缸窯」と小物用の「瓶窯」という区別があり、この店の窯は大物用に特化されていた可能性がある。

画面のかめやつぼは基本的に露天で保存されている。サイズが大きく、水にも強いからであろう。かめは一層、或いは互違いに2層に積むが、壁の前に枝垂れ柳の枝ぎりぎりまで12層に積み上げたつぼの山が見られる。平屋の店舗の屋根より高いつぼの山は、置く場所が節約でき、目印の意味も兼ね、その迫力はまた店の宣伝にもなっていたのであろう。

店の中で、「暖帽」をかぶっている者は主人で、空き地の縁台と石に座って雑談をしている笠の二人は客であろう。既に支払いは済み、寛ぎながら荷積みを待っている様子である。大きくて重いかめやつぼの運搬に水路が利用されている。すぐ側に付けられた船の甲板にすでに大きなかめが逆さに置かれ、運び屋は天秤棒で4つのつぼを担いで船に向かう途中である。(王)

16　煉瓦造り

煉瓦の素地造りの場面が見られる。

画面左側の二人の男性は話し合いながら土と水を運んできている。土はもっこのような器に盛られており、水は水桶で運ばれ、ともに天秤棒が使われている。土運びの者は胸で留める腰切りを着ている。水運びの者の垂らした弁髪を見れば、藁帽子のてっぺんに穴が開いていることが分かる。二人とも裾を巻き上げ、藁靴をはいている。

作業は中央部の空き地で行われており、しゃがんでいる者は成形を担当している。明代の『天工開物』（1637）は煉瓦造りの工程について記しているが、それによれば、水を加えながら数頭の牛に踏ませて粘土をこねる。木枠につめ、「鉄線弓」という針金でその表面をそぎとるという。ここでは、牛の代わりに鍬で粘土をこね、針金ではなく、木の棒で粘土を木枠に押し詰めながらはみ出た部分を削り取っているようである。江南地方では「善泥」と呼ばれ、粘性が強く、粒子が細かい土が多く、煉瓦などの焼

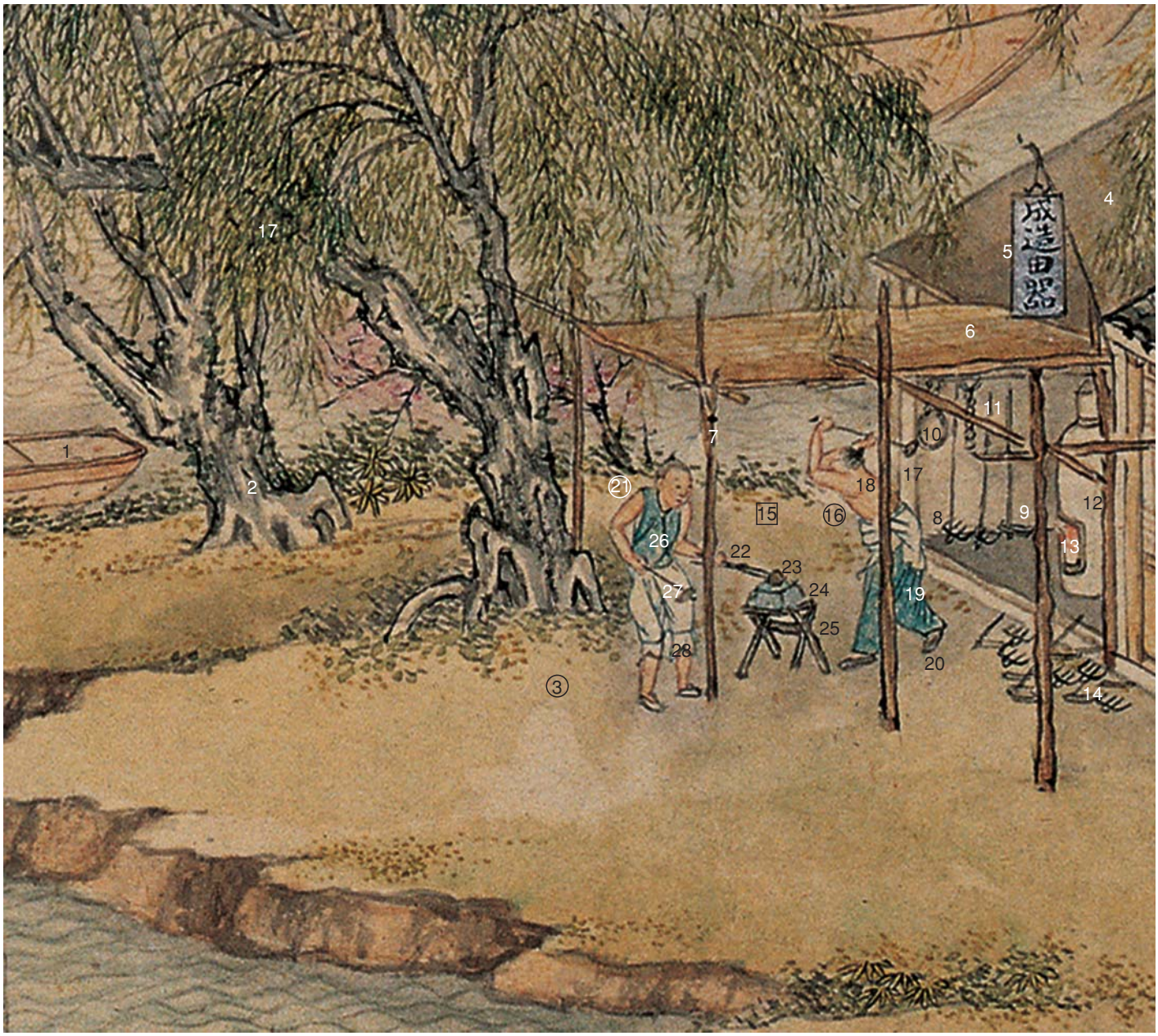
1 網干し
2 枝垂れ柳
③ 煉瓦造り（造磚）
4 土を運ぶ
5 腰切り（対襟短衣）
6 たくし上げたズボン
7 藁靴（草鞋）
8 水を運ぶ
9 水桶
10 穴の開いた藁帽子
11 辮髪
12 上着（短衣）
13 扱き帯（汗巾）
⑭ 素地の成形
15 鍬（钁）
16 粘土（稠泥）
17 木の棒
18 木枠（模匣）
19 しゃがむ
20 煉瓦の素地（磚坯）
㉑ 素地の乾燥
22 素地を運ぶ
23 天日干し中の素地
㉔ 停泊中の船
25 もやい杭
26 もやい綱（船纜）
27 もやい柱
28 櫂（槳）
29 棹
30 苫（船篷）

物に適している。実際、北京の皇居に敷く「金磚」はもっぱら蘇州で作られていたのである。

成形した煉瓦の素地は枠から取り出され、右側の一人はそれを日当たりのよいところに等間隔に並べている。天日で乾燥させた素地は、恐らく船で窯まで運ばれるのだろう。水は、煉瓦造りの不可欠の原料であるだけではなく、また運輸の重要な手段でもある。これもこうした作業に水辺が選ばれた理由でもあろう。

煉瓦は壁用、城壁用、橋用、地面用など幾つかの種類に分けられている。形と大きさから見れば、ここで造られるのは主に壁などに使われる「墻磚」のようである。煉瓦の大量生産は明代以降のことであり、「姑蘇繁華図」では、ほとんどの建物の壁には煉瓦が使われている。（王）

17　槌音響く村の鍛冶屋



鍛冶屋が描かれている。「成造田器」（農具の注文を受付ける）の看板や、そして室内外の鍬、熊手鍬などの製品を見れば、農鍛冶の専門店かもしれない。鍬や熊手鍬は、重要な耕起具である。柄が付けられた完成品を買う者もいれば、金属部だけを購入し、自分で柄を付ける者もいる。

画面の中央に二人の男が相槌をしている。左側の親方は左手に鉗、右手に小槌、右側の先手は両手で大槌を持つ。親方の指示が終り、先手が大槌を高く挙げ、まさに打とうとしている。これは鍛冶工程の中で最も迫力のある瞬間であり、また典型的な場面として中国、日本、韓国の多くの絵画で定着している。季節はまだ春なのに、作業の暑さで、親方は袖なしの上着を着ており、先手は諸肌脱ぎになっている。

衝撃に耐えるため、大きい金床が使われている。ここの金床は上が小さく底が大きい枡形となっており、木の台の上に置いて使われている。日本では親方は座って作業するのが基本であるが、中国では二人とも立っており、この台は高さを調節する役割を果たしている。金床の位置が高いので、中国では大

1 船
2 枝垂れ柳
③ 鍛冶屋（鉄匠舗）
4 板葺
5 看板「成造田器」
6 草葺の日除け（涼棚）
7 掘っ立て柱
8 熊手鍬（鉄搭）
9 鍬（钁）
10 鉄輪（鉄環）
11 鎖（鉄鏈）
12 火炉（ほと）（竪炉）
13 炊口（炉口）
14 鍬先
15 相槌を打つ（打鉄）
⑯ 先手
17 大槌（大鉄錘）
18 諸肌脱ぎ
19 ズボン（褲子）
20 布靴（布鞋）
㉑ 親方
22 鉗
23 地金（熟鉄）
24 金床（鉄砧）
25 木台
26 袖なしの上着
27 小槌（小鉄錘）
28 裾紐で止める
29 瓦葺（瓦房）
㉚ 格子窓（檻窓）
31 立枠（抱框）
32 膳板（榻板）
33 腰壁（檻墻）
34 敷居（下檻）
35 看板（招牌）
36 作業を眺める
37 帽子（暖帽）
38 机
39 腰掛け（板凳）
40 大棟（屋脊）
41 切妻（山墻）
㊷ 格子戸（槅扇）
43 欄間（横披）
44 壁

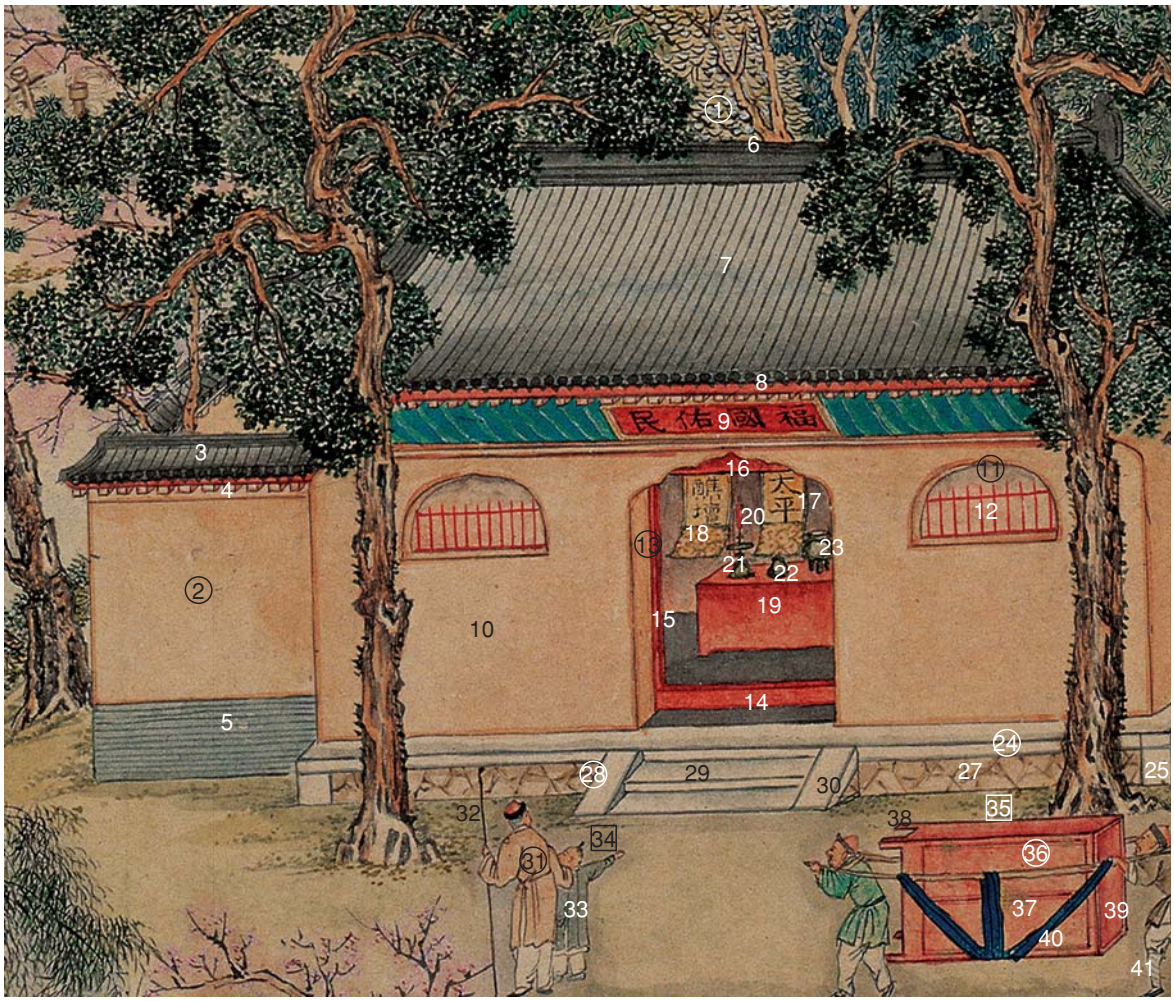
槌の柄もやや短い。

右側の室内に竪長の火炉（ほと）が設置されており、炊口から赤い火の手が見える。一方、鍛冶に重要なふいご、冷却槽などの装置はこの画面では確認できない。地金の熱加減を調節しやすいように、普通、親方が立つ横座は、火炉に近い位置、向こう槌をする先手は、火炉から遠い位置で作業するのであるが、ここではなぜかちょうど逆の位置となっている。

建物の造りは簡単である。火炉がある場所は屋根が板葺で、掘立柱で支える草葺の日よけで作業空間を広げている。右隣の瓦葺、格子戸の部屋は寝起きする部屋であろうか。

やや離れたところで、座って鍛冶の作業風景を眺める二人の人物がいる。想像を逞しくすれば、この二人は農具を大口注文した客であり、作業の進度を確認し、完成を待っているようにも見える。その場合、彼らが座っているところを含め、瓦葺の2間と板葺の1間はともに鍛冶屋のものとなるが、残念ながらそれを裏付けられる情報は、この画面では確認できない。（王）

18　村はずれの寺院

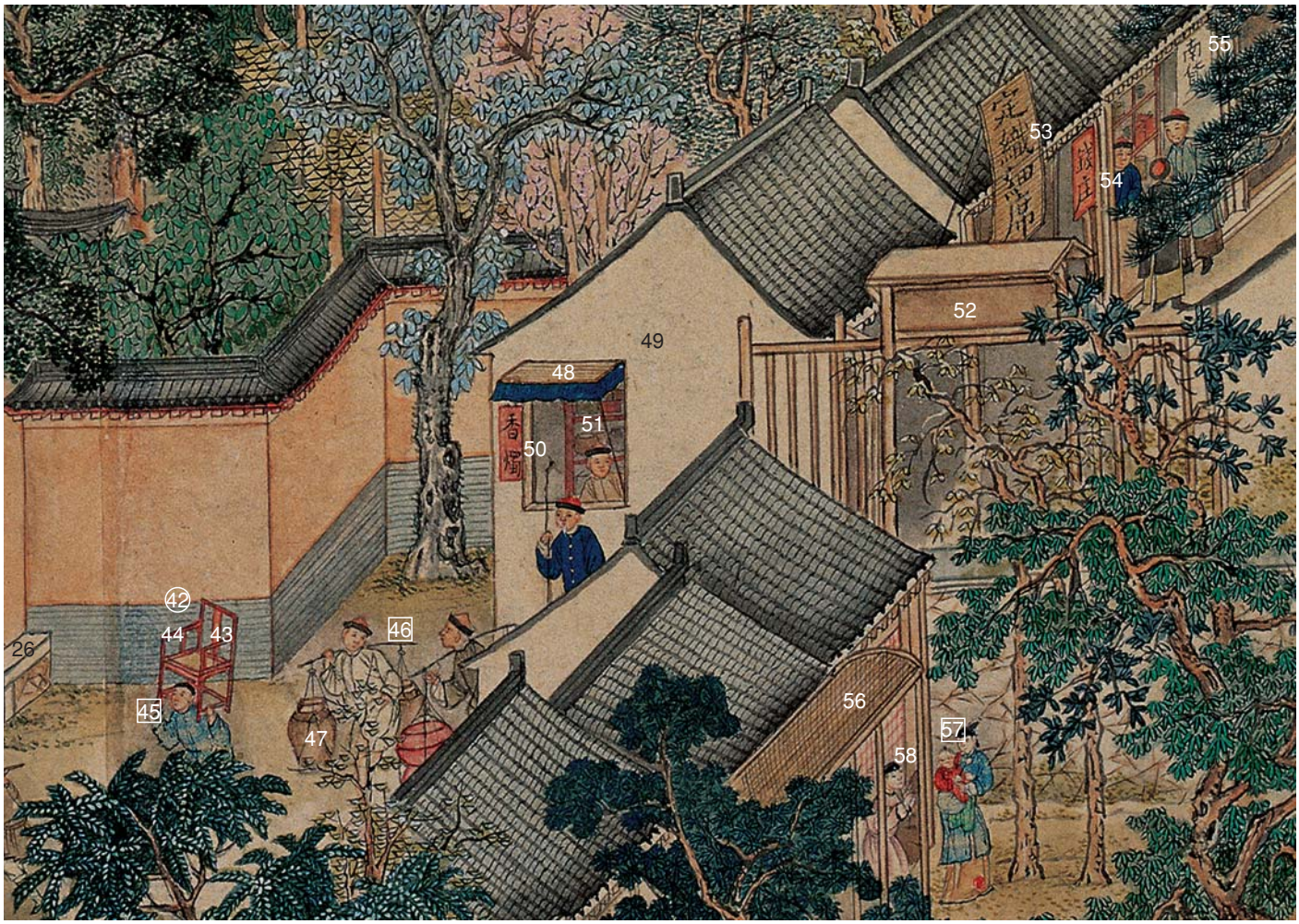


① 寺院
② 築地塀（囲墻）
3 雨覆（滴水）
4 垂木（椽）
5 腰（勒脚）
6 大棟（屋脊）
7 瓦屋根
8 瓦座（封檐板）
9 額「福国佑民」
10 黄色い外壁
⑪ 花頭窓
12 柵
⑬ 門
14 敷居（門檻）
15 立枠（抱框）
16 鴨居
17 掛け軸「太平」
18 掛け軸「醮壇」
19 長机
20 赤蝋燭（香燭）
21 燭台
22 鈴
23 香炉
㉔ 基壇（台基）
25 束石（角柱石）
26 葛石（階条石）
27 乱積み（乱石砌）
㉘ 石階段（踏跋）
29 石段（踏歩）
30 耳石（垂帯石）
㉛ 老人
32 杖
33 子供
34 指差す
35 二本棒で担ぐ（抬）
㊱ 箪笥（柜子）
37 ドア（柜門）
38 足（柜脚）
39 天板（柜頂）
40 たすきがけ（布帯）
41 脚絆（綁腿）
㊷ 肘掛椅子（靠背椅）
43 背もたれ（靠背）
44 肘掛（扶手）
45 頭上に挙げて運ぶ
46 天秤棒で運ぶ
47 酒甕
48 日除け（幔）
49 切妻（山墻）
50 看板「香燭」
51 棚（貨架）
52 木柵門
53 看板「定織細席」
54 看板「銭荘」
55 看板「南貨」
56 庇（檐篷）
57 赤ん坊を抱く
58 召使の女性

木涜鎮のはずれにある寺院が描かれている。赤い窓、門、長机、蝋燭、扁額、瓦座と黄色い外壁、掛け軸がよく調和しており、荘厳たる雰囲気を醸し出している。中国では朱と黄の組合せは皇権以外に、宗教の象徴としても多用され、特に黄色い外壁は仏教施設によく見られる。

「坐北朝南」と言われる通り、この寺も北を背に南向きに建てられている。塀は屋根付きであり、腰も高く、建物は高い石の基壇に築かれており、境内は茂る大木によって覆われ、この寺の格式が思い知らされる。石階段の前に2本の大木が見られる。寺の中軸線からしてほぼ左右対称の位置にあり、種類や大きさも同じで、寺の正面を標識する役割を持っているといえよう。

室内の長机に香炉、赤蝋燭、法器である鈴が見られ、壁に掛けられている「太平」と「醮壇」の掛け



軸を見れば、これは太平醮のための祭壇であることが分かる。「醮」とは、神に対する祈願儀礼である。道教との関係が深いが、民間では仏教・道教の区別をしないことが多い。廟（民間では宗教施設一般を指す語）で行われることが多いが、対象は廟の主神、或いは仏道二教の特定の神仏ではない。当時の日用類書を紐解けば、水、火、健康、死者など様々な理由で「醮」の儀式が行われていたことが分かる。ここでの「太平醮」は、無事平穏、五穀豊作を内容とするものである。祈願の内容は寺の扁額である「福国佑民」と合わせて、「盛世」、「太平」を称える画巻の主題との深い関連が窺える。それをさらに強調しているかのように、子供が祭壇を指差し、杖をつく老人にその意味を尋ねる場面が描かれている。

村はずれに当るためか、右側の商店街の入り口に木柵の門が設置されている。恐らく夜間は閉ざされるのであろう。「南貨」（江南特産）の店や「銭庄」（両替所）が見られるが、入り口に一番近い店は注意を引く。看板「定織細席」から判断すれば、これは上質莫蓙の受注製作をする専門店であるが、商品である莫蓙を看板として高く掲げている。さらに立地を生かし、お香や赤蝋燭なども扱い、寺参りの客がすぐ目に付くように南の妻に窓を開け、「香燭」の看板を出している。その商売上手に感服する。

手前に荷物を運ぶ行列が見られる。重い箪笥は3本のたすきがけと2本の担ぎ棒を使って2人で担いでおり、肘掛椅子は1人で頭の上に挙げて運んでいる。酒甕やその他の荷物は天秤棒を使っている。

なお、右下に赤ん坊を抱く女性が見られるが、邪気払いという意味があるため、中国では赤ん坊や子供に赤の服を着せることが多い。（王）